

『戦後日本、記憶の力学：
「継承という断絶」と無難さの政治学』

福岡良明* 著、作品社、2020 年

水 出 幸 輝†

副題に掲げられている「継承という断絶」は、撞着語法的な表現でありながらも本書の意図を的確に示している。従来の記憶研究において、記憶の選択をめぐる政治性は盛んに議論されてきた。「記憶されたもの」と「記憶されなかったもの」を対置させ、見過ごされた記憶の意義を強調するように。だが、本書に通底しているのは、「記憶されたもの」の構築プロセスに迫ることで、「記憶されたもの」の内部から見過ごされてきた事実をあぶり出す姿勢だろう。その作業を通じ、「継承を進めることによって、促進された忘却」を読者に突きつける。「継承」とは、その内部にすら「忘却」のロジックを抱え込む矛盾した営みなのだと。

本書は、戦争をめぐるメディアを素材に、人びとの記憶認識が、どのような社会背景やメカニズムのもとに構築されてきたかを丹念に検討したものである。まず、第Ⅰ部「空間の力学：『記憶の場』の構築と齟齬」を構成する3つの章は、悲劇の記憶の拠り所とされてきた空間の分析にあてられている。主な対象は、日本の戦没者を祀る場でありつつも広く国民に受容されているとは言い難い靖国神社と千鳥ヶ淵戦没者墓苑、被爆地である広島と長崎の遺構・モニュメント、沖縄戦没者を象徴する空間となった摩文仁である。

それぞれの空間は、戦後史の中で小さくない変容を経てきた。例えば、現代社会においてA級戦犯合祀問題や首相・閣僚の公式参拝の是非が問題化される靖国神社は、もともとそのような「政治主義化」したものではなく、「あくまで死者とのごく私的な対話を可能ならしめる場所」（27頁）であった。あるいは、沖縄戦没者追悼式が執り行われている摩文仁も、戦後の早い時期からその場所で公式な式典が行われているわけではなかった。著者が論じるように、それぞれの空間は、戦後史を辿る中で同時代の社会背景に影響を受けつつ、特定の意味を有する空間として成立している。

「記憶の場」という空間を社会的に構築するためには、残そうとする人びとの手が加えられなければならない。遺構やモニュメントは物理的な風化を避けることができないからだ。残すためには改装や補修整備が必須である。しかしながら、著者はそうした残す行為に潜む忘却に目を向ける。

原爆ドームにはかつて、自然倒壊が現実味を帯びた問題として存在していた。「外側へ35センチも傾き、30メートル離れた電車道を自動車が通るたびに、5ミリ近くも壁が揺れていたという」（85

* 立命館大学産業社会学部教授

† 同志社大学社会学部助教
mizu.koki.mizu@gmail.com

頁)。遺構であるがゆえに物理的な風化の問題が差し迫っていた。結局は保存、補修工事が施され現代の原爆ドームが存在するが、それは、「物理的に風化している」という事実を覆い隠したものである。「補修工事によって遺構に人為的に手を加えることは、それを『現物』として保存するのではなく、あくまで『本物らしさ』の装いを糊塗することでしかない」(93頁)。そしてその「本物らしさ」は、観光客のまなざしを意識したものであった。だからこそ、「少なくとも、戦後の初期には感知されていた被爆遺構のおぞましさのようなものは後景化し、来訪者の期待に沿う『記憶』が心地よく提示される」(93頁)。抜け落ちているものは少なくない。

保存し、「本物らしさ」を装うことによって、観光客のような新規参入者を獲得できる。来訪者はその空間に身を置くことで、当時を想像し、追体験することだろう。それらは継承の一つの姿である。しかし、そうした「残す」営みの中にも、忘却や風化が潜んでいるのだ。「保存」によって、当時のおぞましさを「上書き」し、「ある種の見た目の心地よさ」(322頁)が原爆ドームを覆っている。継承の力学が忘却を駆動する。

続く第Ⅱ部「文化の力学：ポピュラー文化と死者の情念」では戦争映画作品を中心にポピュラー文化が扱われ、第Ⅲ部「社会の力学：『無難さ』の前景化と現代」では現在あるいは今後の問題としての「継承」が検討される。ここで指摘される問題も空間を論じた第Ⅰ部から一貫したものである。市川崑監督『野火』(1959年)や深作欣二監督『軍旗はためく下に』(1972年)などを読み解くことで照射されるのは、「跪拝」の対象になったかにみえる現代戦争映画の特性だ。2000年代以降の戦争映画では戦争体験に共感する場面がしばしば強調される。そのような戦争の記憶を「敬虔にうやまい、受け継ぐべきもの」(147頁)とする態度は、規範的な態度に見える。だが、「死者に寄り添うかのような美化が、逆に死者の口を封じ、調和的な『継承』が、当事者の語りがたい怨念や背景の史実を後景化」(183頁)してはいないだろうか。浮かび上がってくるのは、公的な歴史や史実を後景化させ、誰にとっても当たり障りなく受け入れ可能な記憶の語り口が支持される「脱歴史化」や「無難さ」といった、記憶を残すことで駆動される忘却の力学である。

著者が指摘する通り、受け継ぎやすいものの提供／受容はオーディエンスたちの思考停止を招く可能性がある。無難で受け入れやすい形式は、オーディエンスの拡大という結果を期待させるだろうが、記憶の継承は一筋縄ではいかない。どこまでも困難さが付きまとうのだ。

本書で展開される「継承という断絶」への注目は、テクノロジーと「残す」営みを組み合わせようとする現代社会において重要な問題提起といえるだろう。それは戦争の記憶のみに閉じた問題ではない。例えば、2019年は戦後最悪の被害をもたらした伊勢湾台風(1959年)の60周年の区切りにあたり、被害が甚大だった名古屋市では例年以上に記念の催しが盛り上がっていた。地元のテレビ局でも伊勢湾台風の記念日である9月26日前後に特集を組んでおり、中でもCBCは「色」にこだわりを見せた。「伊勢湾台風60年 色と記憶」(2020年9月26日放送)という番組では、一般の写真愛好家がカラーで撮影した当時の写真のフィルムを専門の業者がより鮮明に復元したものや、CBCに残る白黒フィルムをAIの技術でカラー化したものを紹介している。「60年前のカラー写真、それは被災者の思いを新たにし、知らない人には確かな現実としてあの災害を伝える存在でもあるのです」といったナレーションは、過去の巨大「災害を伝える」こと、継承することへの使命感をうかがわせる。社会的な評価も高く、この番組は第61回科学技術映像祭で「文部科学大臣賞」を受賞した。

たしかに、当時の色合いを蘇らせる技術には目を見張るものがあった。新鮮な体験であり、人び

との関心と呼ぶかもしれない。出演者は「カラーだとすごい身近」とコメントしていた。だが、本書を読み通して改めて考えてみると、「その『とっつきやすさ』にどれほどの意味があるのだろうか？」という疑問が浮かぶ。「色」にこだわり、カラーに塗りつぶすことで、むしろ伊勢湾台風の有する歴史的な文脈を消失していないだろうか。

現代のメディア環境において、「色」は映像の時代性を感じさせる重要な要素である。例えば、多くの若者世代が親しむ YouTube では新旧さまざまな映像に触れることができる。そこで、画素の粗さや白黒映像といったメディアの形式は重要な意味を持つだろう。だとすれば、カラー化はそうした映像に残る時代感覚の手掛かりを消し去っている。また、「これは、とても古い映像ですが、現代の AI 技術を使えばきれいなカラー映像で見ることができます」と種明かしをされたとき、驚きはあるのかもしれない。しかし、その驚きは「〈AI の技術〉がすごい！」という感想に落ち着く。本来目を向けるべき伊勢湾台風そのものに、どれほどの想像が及ぶだろうか。

マス・メディアが組織として継続してきた周年報道の蓄積は、人びとが伊勢湾台風の用意した文脈を読み込むための重要な報道資源であるはずだが、先端技術に関心を示すあまり、そうした文脈は後景化していたように思う。本書の指摘にあるように、わかりやすく継承するための志向性が、むしろ文脈の喪失をもたらしていた。

もっとも、間口を広げる努力は必ずしも悪いことではない。継承のためには必要なことだろう。情報技術の発達で、社会的な想起の機会を増やしているという実感も若い世代にはあるようだ。評者が担当していた講義で、ジャーナリズム組織としての新聞社が社会の集合的記憶に果たした機能を論じたことがある。その講義に学生たちが寄せた感想の中に、「現代社会において、社会的に記憶を想起させるメディアはインターネットだと思います。インターネットの発達により、社会的な記憶は保持されていくのだろうと考えました」というものがあった。この学生に限らず、インターネットに期待を込める者は少なくない。だが、インターネットによる想起とマス・メディアによる想起の体験は異なるものだろう。マス・メディアであれば集合的（マス）な想起という共時体験そのものに意味を見出すことができるからだ。

デジタル技術の進歩により「残す」ためのコストは低くなり、インターネットを介した「想起」のタイミングを増やすことも技術的には可能となる。しかし、そうした負担の縮小にはそれなりの反動がある。本書は、こうした現代のメディア環境を相対化する意味でも重要な価値を持つ。最後に改めて、記憶体験を聞くことと、読み込むことの差異を念頭に置いた著者からの問いかけを引用しておきたい。

その意味で、「いま聞き取らなければならない」という「継承」の欲望は、過去の体験者の忘却を生み出している。さらに言えば、メディアや教育の場においては、存命の体験者に話を聞くことと、過去の膨大な資料を読み解く手間を省くこととが、ときに表裏一体になっていることもあるのではないだろうか。（11 頁）

記憶の「継承」に伴う困難さにどう抗うのか。手軽さのみを追求するあり方は、最適解ではないのだろう。戦後 70 年とその先に。現代的なメディア環境だからこそ、「継承という断絶」の矛盾に目を向ける必要がある。